

近世演劇に見る順礼の諸相

——近世中期の上方歌舞伎——

河合眞澄

近世演劇の中に、順礼（芝居では、もっぱらこの表記、以下、「順礼」を使用する）は多く登場する。元禄四年（一六九一）に上演された歌舞伎「四国辺路」には、四国遍路（当時は「辺路」と表記、以下、「辺路」を使用する）の実態が反映されていた（平成十三年度愛媛大学公開講座プロシィーディング『四国遍路と世界の巡礼』参照）。芝居に作り上げるための潤色を割り引いて考えなければならぬが、当時の人々にとって、芝居は重要な情報源であった。

しかし、元禄期の歌舞伎狂言の実態は、主にあらず本である狂言本でしか知ることができず、細部を知り得ない憾みが遺る。少し時代を下って、享保頃になると、現在の脚本にあたる台帳が多く現存し、かなり詳細な内容を知ることができると。現存する近世中期の歌舞伎の台帳は、ほとんどが上方のものである。これらの台帳にもとづいて、近世中期の上方歌舞伎に現れる西国順礼および四国辺路の実態を検討する（『歌舞伎台帳集成』の翻刻を利用し、引用はこれによったが、一部表記を改めた）。

西国順礼

三十三所の観音廻りをする西国順礼は、札所の多くが上方にあり、上方で見かける機会が多いため、数多くの歌舞伎に取り入れられている。

一、「傾城建仁寺供養」（享保九年・一七二四、京・布袋屋梅之丞座）

曾根松の段

播磨国加古川の茶店の女おはまは、往來の順礼たちに「お茶参つてござりませ」と勧め、報謝をする。それに対して順礼が、「南無大慈大悲の觀世音菩薩」と言つて茶を戴くのは、報謝返しの言葉である。

おはまは、「精進潔齋にして 札所をめぐつてこそ後生にもなるふし 觀音様もよろこびやさんしよに」と言い、西国順礼が後生願いのためであること、觀音信仰であることが明確になる。

また、ここでは「何をかなみのこゝに清水」という順礼歌の一部が使われている。西国順礼歌・坂東順礼歌ともに、当時の流行歌集『淋敷座之慰』（延宝四年・一六七六刊）に収録されている。順礼歌は詠歌ともいい、時には歌詞の一部に異同があるが、近世中期には広く人口に膾炙して、流行歌として扱われていた。

順礼は、「奥坂東を打てこれへ参つた」と言う。つまり、坂東順礼の後で西国順礼をしているわけで、順礼が一種の風俗と化していたことが理解される。順礼は「打つ」と言つたことも、ここからわかる。

二、「傾城妻恋桜」（享保十七年・一七三二、京・早雲長太夫座）

上之口明

この場面のト書きには、「菅笠・杖・笈摺懸 順礼の形にて」と書かれていて、これが順礼の定型の身なりであったことが確認できる。「觀音様の御利生」のおかげで、足もあまり痛まないと言ひ、觀音廻りであることをはっきりと打ち出している。

順礼の目的は、「順礼執行致し 皆様に懺悔は 罪障滅ぼしまする為」「現世未來 現当二世の為」ということであり、罪障を消滅し、現世・来世の幸福を求めるというものであった。

三、「幼稚子敵討」(宝曆三年・一七五三、大坂・角の芝居) 四つ目

お町という女性が「順礼の形 薦包を背負い 竹杖を持出」とあり、これも順礼の身なりの一つの型である。

この場面は讃岐国で、お町は西国順礼ではなく四国辺路とも考えられるが、この作は金毘羅利生譚であって、場所を讃岐国に設定する必要があった。また、お町が発したものは紀伊国で、敵を追い求めて讃岐国にたどり着いたものである。したがって、西国順礼と考えても差し支えない。

お町が順礼となっているのは、移動の自由を得て、敵を探索する手段である。歌舞伎では、敵を探し出すため、順礼の姿にやつす例は多い。

四、「恋飛脚千束文月」(宝曆四年・一七五四、京・四条通南側芝居)

三ノ口

この場面は、姫路の八正寺の開帳参りの場面に設定されている。幕開きに「物貰ひ 願人 乞食 順礼 賽の川原並び居る」とあるのは、参詣の人々を当て込んで、喜捨を期待する物乞たちである。つまり、ここに登場する「順礼」は、信仰心で廻国する本物の順礼者ではなく、順礼の出立ちで立っている物乞の一種と考えられる。

このようにうわべの格好だけを真似て、往還で報酬を受けることを生活の手段とする順礼が、出現するようにもなっていた。順礼に対して報酬する人が多いことを当てにして、生業としていたのである。

五、「けいせい熊野山」(宝曆十三年・一七六三、京・四条通南側芝居)

四つ目

これは敵討を扱った作で、紀伊国で敵同士の次郎と平太郎がめぐり会う。

この場面では、一番札所である紀伊国那智と結願の三十三番札所美濃国谷波の詠歌とが、せりふの中に出てくる。

次郎は着物の下に、襦袢の代りに笈摺を着ている。そこには一番札所那智の「普陀落や岸うつ浪は三熊野の那智のお山に響く滝津瀬」という詠歌が書かれていて、「死出立に詠歌を写しましたるは 親が冥途の為 一つには 敵にめぐり逢ひ升る心願」であると言う。一方、当の敵である平太郎も、同じく襦袢代りの笈摺に、三十三番札所谷波の詠歌「今迄は親と頼みし笈摺を脱ぎや納むる美濃の谷波」を記していて、ここで次郎に討たれる覚悟を示す。ここでは、順礼の詠歌をうまく趣向に生かし、次郎是那智の観音に、亡父の後世安楽と自分の敵討成就とを祈念して、現世・来世の利益を求めているのである。

六、「伊賀越乗掛合羽」(安永五年・一七七六、大坂・中の芝居)

九ツ目

ここでは、敵討の旅に出ている夫を追う妻お種が、「笈摺 菅笠 杖 順礼の姿」で、幼い息子巳之助を背中におぶって登場する。同じく敵討の旅に出ている許婚を探すお袖が同行し、こちらも「同じく順礼の姿 杖 風呂敷 包少々負ひ」という順礼の定型の姿である。

一行は、「深山路や松原松原分け行かば榎尾寺に駒ぞ勇むる」という四番札所の順礼歌を口ずさみながら登場する。

「幼稚子敵討」「けいせい熊野山」と同様に、これも敵討の話であり、移動の自由があまり認められていない当時、特に女性や子供にとって、順礼となるのは、有効な移動の手段であった。

七、「金門五山桐」(安永七年・一七七八、大坂・角の芝居) 三ノ口

現在でも、「楼門」の場としてよく上演される南禅寺山門の場面である。

ここに真柴久吉(羽柴秀吉の当て込み)が、「順礼の形」にて 笈摺を懸 笠を持 杓を頬杖にして「姿を現す。順礼の定型の姿に、報酬を受けるための柄杓もあったことがわかる。

禅宗の南禅寺に、観音廻りをするはずの順礼がやってくるのは、違和感があるが、順礼は巡拝の途次、信仰目的以外の社寺に立ち寄ることもあった。

打ち込まれた手裏剣を、久吉は柄杓で受け留め、「順礼に御報謝」というせりふを口にする。これは順礼が報謝を求める定型句であり、それを趣向に生かしている。

八、「袖薄播州廻」(安永八年・一七七九、大坂・角の芝居) 五段目

場面は播磨国で、順礼が「西国の形」で登場する。ここでいう「西国」(当時は「さいこく」の発音が一般的であったと思われる)は西国順礼のことであり、短縮して「西国」と言っただけで意味が通じるほど、西国順礼が馴染み深いものになっていたことを示している。

「わしらは初て西国し升^かから」という用法も見られ、西国順礼の旅をすることを、「西国する」と言っている。これも西国順礼の一般化の現れである。

ここに登場する順礼は、「此書付の処で泊れと 国元の者が教へました」と言い、順礼の旅に出る者同士が情報交換をしていたことも推測される。

四国辺路

四国辺路は、上方では直接見かける機会がないため、歌舞伎に登場する例は少ない。四国辺路については、伝聞情報に頼っていたものと思われる。

九、「竹籠太郎怪談記」(宝暦十二年・一七六二、大坂・角の芝居)

四国辺路の登場する歌舞伎は、この作しか見当たらなかったが、土佐を舞台とする二つの幕に四国辺路が描かれていて、かなり詳細に情報が伝えられている。田中智彦氏の指摘によれば、最初の辺路絵図は宝暦十三年に出版されているが(平成十三年度愛媛大学公開講座プロシィーディング『四国遍路と世界の巡礼』参照)、本作の上演がそれに先行していることは興味深い。

A、三ツ目

まず「四国辺路の道者四五人」が登場し、四国辺路をする者は、道者とも呼ばれていたことが判明する。せりふの中に「真念庵といふて 辺路の旅人

を泊める所があるげな」とあるが、真念庵は、真念という十七世紀末の僧が建立した実在の報謝宿である(田中智彦氏、同前参照)。

「逆に廻る」という表現も見られ、一番札所から順を追って廻るのではなく、逆に打つ者もあったと思われる。

ここには、敵討の相手を探し求める二人の女性の辺路が登場し、「伊賀越乗掛合羽」同様、移動の自由を得て国々を尋ね歩くよすがとしている。

B、四ツ目

ここは真念庵の場面で、辺路の道者たちが「杖 笠 草鞋 行李飯杯」を携えて、旅立ちの用意をし、「南無大師遍照金剛」という報謝返しという言葉で口にする。真念庵の僧は、札所の道順の案内や通行手形の扱いを教える。これらは、真念庵の実態を写していると思われる。

また、「高野山より八十八ヶ所を改めの役人」がやってきて、「真言の寺々法流を吟味する」ことになっていると言う。言うまでもなく、四国辺路は弘法大師ゆかりの霊場を廻るのであり、真言宗の本山たる高野山の監督下にあったのである。

以上を総合すると、近世中期の上方歌舞伎では、比較的行程の容易な西国順礼は、すでに風俗化していたと言える。嶮岨な山道に行く四国辺路でさえ、ある程度風俗化していたことも窺える。気候のよい春に四国辺路の旅に出る者が多かったことを示す「秋遍路」という語が近世に見られることから、これが裏付けられる。

また、敵討物における巡礼や辺路の用例が多く、とりわけ移動の困難な女性や子供が、安全かつ自由に旅をする手段としていた。

このような劇中の西国順礼・四国辺路は、いわば観客の代参であり、まだ見ぬ土地についての興味を促し、情報を与えてくれる役割を果たしていたと推測されるのである。